

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652036

研究課題名(和文) 亡命芸術家による文化的アイデンティティの再構築に関する包括的研究

研究課題名(英文) General studies about the reconstructing of the cultural identities of the artists in exile

研究代表者

大田 美佐子 (Misako, Ohta)

神戸大学・人間発達環境学研究所・准教授

研究者番号：40362751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：音楽史の記述において、第二次世界大戦前やその最中に亡命した芸術家たちは、亡命地での活動についてヨーロッパの視点で位置づけられてきた。本研究では、「文化的アイデンティティの再構築」をテーマに、クルト・ヴァイルのアメリカでの活動と伝統との関係性、新しい美学の構築、代表作『三文オペラ』やアメリカ作品の受容を中心に調査した。また、その活動を比較する要素として、ワイマールのキャバレーのアーティストたちの活動、なかでもアメリカのフリードリヒ・ホルンダーやイギリスのミーシャ・シュポリアンスキーの活動。オーストリアでオペレッタ作曲家であったフリッツ・シュピールマンのアメリカでの活動を整理した。

研究成果の概要(英文)：The artists in exile between the Wars in 20th century had been explained mainly from the cultural point of view from Europe. Many artists in exile had to reconstruct their cultural identities for their activities in the new country: the US. In my research I tried to bring out the following four points. At first I tried to grasp the materials about exile cabaret in the U.S. and I collected the materials at the German Cabaret Museum in Mainz: mainly about Friedrich Hollaender, Vareska Gert etc. And secondly I would research about Kurt Weill's American musical theater pieces and their aesthetics and reception in the U.S. I tried to find his newly constructed aesthetics in America and the continuity or discontinuity from his musical theater pieces in Germany. Thirdly the effect and echo of Weill's artistic activities and his theatre pieces in the U.S. As conclusion I tried to depict Weill's artistic activity in music cultural history in exile of America.

研究分野：芸術学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術史、芸術一般

キーワード：亡命芸術家研究 アメリカ音楽史の研究 ミュージカル研究

## 1. 研究開始当初の背景

この研究の契機は、「亡命芸術家」の創作活動を、どのような視点から捉え直すのか、という問いである。

従来、西洋音楽史において、第二次世界大戦を契機に亡命した芸術家たちの活動については、亡命前の創作活動の視点から評価されることが多かった。アドルノのヴァイル評価はその代表例である。その結果、クルト・ヴァイルのようにヴァイマル共和国での創作活動がラディカルであればあるほど、亡命の地での活動はその「ギャップ」として捉えられた。しかし、ヴァイルのアメリカでの活動はヨーロッパの視点から捉えられたものではないだろうか。

「亡命芸術家」の研究では、このようにして「アイデンティティの変化」が重要なテーマとなる。創作の基盤となる作曲家の「アイデンティティ」は亡命という移動と環境の変化のなかで、揺らぐ。従来、西洋芸術音楽を中心とし、作品を完成された「テキスト」として捉えてきた「評伝」では、亡命芸術家が新しい環境のなかで構築してきた「アイデンティティの問題」や社会との関連性は、テキストよりも副次的な問題となってしまう。しかし、亡命した芸術家の多くは「外＝社会」の変化が「内＝作品内在的」の変化と強く結び合っている。

亡命芸術家のなかでも、いわゆる「軽音楽」あるいは「娯楽音楽 (E-Musik = Ernst Musik)」とよばれる芸術キャバレーの芸術家たちの実態は、どのようなものだったのだろうか。ワイマル共和国のキャバレー・シーンで活躍した芸術家の亡命後の活動については、まとまった資料の状態は把握できていなかった。

そこで、「アイデンティティの再構築」という問題を抱えたヴァイルとキャバレーの亡命芸術家の創作活動を、具体的に「伝統」「新しい美学の構築」「受容と伝播」という点から整理し直そうと試みた。

最終的に、「亡命芸術家」の研究は、音楽史のなかに「地域」の視点をより多く盛り込み、大きな歴史の流れと対峙させることで、歴史記述の可能性を問う作業になるだろうと予測した。現在のように、身障者や精神障害を持つ人々、LGBT(性的少数者)などのマイノリティーとの境界線に目を向けてきた表現の世界から相対的な視点で見ると、西洋音楽史は「名曲」を生み出した「著名な作曲家」を中心にして構成されてきた。後者の歴史記述の方法は、今後も重要な手法のひとつとしては残っていくだろう。しかしながら、このテーマ自体が、様々な点で 20 世紀前半の「音楽文化史」を描く手法の開拓につながればよいと考える。

## 2. 研究の目的

実際、ピーター・ゲイが指摘するように (“We miss our Jews – The Musical Migration from Nazi Germany”, in *Driven into Paradise*, University of California Press, 21-32pp., 1999)、「亡命芸術家」の数は多く、亡命の理由も亡命後の活動も多様である。しかしながら「挑戦的萌芽」である今回の研究の目的は、なかでもクロス・オーバーなジャンルで活動した芸術家に注目し、「亡命芸術家」をテーマに研究することの意義を明確にし、具体例を提示することであった。

その対象は大きく分けて二つ。ひとつの対象は筆者が研究を続けてきた「クルト・ヴァイル」。そして、大戦間のベルリンでキャバレーやレビューに関わった人気作曲家、歌手たちである。そして、最終的に音楽文化史的な視点からヴァイルの評伝を書くことを目的とした。

まず、ヴァイルが「ミュージカル界のモーツァルト」と呼ばれるように大きな成功を手にすることができたのはなぜか。彼はピーター・ゲイをはじめ、スティーヴン・ヒントンやキム・コウオーキーが指摘してきたように例外的であったのだろうか。そうであるならば、その理由は何か。「伝統」「新しい美学の構築」「受容と伝播」の視点から、ヴァイルのワイマル共和国での活動とアメリカでの活動の変化にある、「ブラックボックス」の内実について考察することを目的とした。

特に留意した点は、ヴァイルの活動を描くにあたり、作品のみに焦点をあてるのではなく、むしろ他の亡命芸術家と比較する視点を多く取り込もうとした点にある。ヴァイルが作曲した『三文オペラ』の成功以降、特に音楽劇の「中間ジャンル」を得意とし、その音楽が「キャバレーの音楽」と強く結びつけられていることから、芸術キャバレーなど「Kleinkunst (寄席などの大衆演芸)」に関わった人々を比較の対象とした。彼らが直面していた問題やその活動とどのような関係性があるのかという視点である。

これらのことを第一次資料や現地での調査、二次文献から読み解いていく。現時点では、資料収集とそして、最終的には「ジャンル」も「国家」もクロスオーバーする音楽文化史を「アイデンティティの再構築」という点を中心にまとめたいと考えている。

## 3. 研究の方法

「伝統」「新しい美学の構築」「受容と伝播」という三点を中心に、歴史的事実を整理する。主要な方法は文献調査と実地調査である。特に「受容と伝播」という問題を考えるうえで、2013年から2014年冬学期に参加した米ハーバード大学音楽学部のキャロル・オジャ教授による「アメリカ音楽史」のゼミナールの存在は大きかった。ヴァイルという作曲家は、複雑な要素を内包するアメリカ音楽史のな

かで、どのように位置づけられるのか。ドイツからの視点で見た「亡命」という事柄を、アメリカ音楽史という別の視点から捉えることができ、大変示唆に富むものであった。

一方、今回の研究では、当初計画していたインタビュー調査を行うことができなかった。今回積み残した問題とともに、今後の課題として、インタビューという手法も取り入れていきたい。

実地調査のなかでは、貴重な文献を収集することができた。しかしながら同時に、対象とする彼らの作品が「舞台作品」である以上、関連する舞台を観ることは、この研究にとって必要不可欠なことであった。舞台作品は、時代によって、人によって、地域によってまったく別の解釈が施され、生まれ変わっていく。特に亡命芸術家のアイデンティティの問題を、現代の視点からアプローチするうえで重要な視点を与えてくれた。

文献調査、映像資料、音源資料などについては以下の資料館などで大変有意義な調査を行うことができた。

- (1) マインツの「カバレット博物館」内にあるドイツ・カバレット資料館
- (2) 米ハーバード大学のフートン資料館とロエブ音楽図書館、イシャム資料室
- (3) ニューヨークのマンハッタンにあるヴァイル=レーニヤ・リサーチセンター

舞台の実地調査は、『三文オペラ』を中心に以下の劇場で行った。

- (1) ボッフム演劇場 (2011年10月)  
『Die Dreigroschenoper 三文オペラ』
- (2) ケルン演劇場 (2011年10月)  
『Die Dreigroschenoper 三文オペラ』
- (3) ミュンヘン (2011年10月)  
『Die Dreigroschenoper 三文オペラ』
- (4) ニューヨーク (2014年3月)  
『The Threepenny Oper 三文オペラ』

#### 4. 研究成果

##### (1) はじめに

本研究がテーマにする「亡命芸術家」とは、多くの場合、望まなかったにも関わらず、「移動」を余儀なくされ、新しい土地、新しい環境で創作に向き合わなくてはならなかった。つまり、確立された従来からの研究の枠組みとは別の視点で、ディアスポラの問題、「移動」が与えた音楽への影響を描くこと、つまり最終的には亡命者の活動を通じた「音楽文化史」を描くことが目的である。

研究対象は、文中で挙げる複数のアーティストの活動である。また、彼らの活動について「受容と伝播」を同時に調査する必要性もある。目的全体からみると、現時点では、収集した資料の整理をしているところで、道半

ばにある。具体的な研究成果の第一弾としては、「アメリカで見た景色- クルト・ヴァイルの社会派音楽劇の軌跡」(岩波書店『文学』所収、2014年3・4月号、84-98頁)を寄稿することができたが、これは今回の全体的な構想の「序章」に位置する論文である。2014年度の学会や機関誌の論文、評伝として発表する。ここでは、収集した資料を中心に、研究成果の概要を記述するととどめる。

##### (2) 亡命者としてのヴァイル- アメリカ文化のアイデンティティを映し出す音楽劇

亡命芸術家の作品評価にあたっては、新旧大陸における文化的風土の相違が強く影響している。その象徴となっているのが、1950年のヴァイル没年にフランクフルト・アルゲマイネ紙に寄稿されたアドルノによる追悼文である。大戦間期に精力的な音楽批評活動を展開したアドルノのヴァイル評価は、その後のヴァイル研究の起点となり、研究を促進してきた。しかしながら、ヴァイル・ルネッサンスから四半世紀を超えた現在、ヴァイルのアメリカ時代の作品をドイツ時代の作品の「独創性」との関連性で解釈することには限界がある。なぜならば、アメリカのヴァイルを「当時のアメリカの文化的風土」という視点から捉え直してみると、亡命芸術家の研究そのものに「冷戦時代のイデオロギー」、あるいは「ヨーロッパから見たアメリカのイメージ」が関係していることが明らかになってくるからだ。

ヴァイルはなぜ、ヨーロッパ各地で流行し、アメリカにおいてもその評判を轟かせていた『三文オペラ』をアメリカで再生産することを躊躇したのだろうか。そこにはブレヒトが提案していた、アフリカ系アメリカ人の劇団による『三文オペラ』の再演など、重要な鍵を握るプロジェクトがあった。

ヴァイルのアメリカ時代の作品と社会的な背景を精査していくと、そこにはアメリカ文化のアイデンティティを深く問うテーマの設定と、それに相応しい形式の深い関連性が指摘できる。具体的で顕著な例としては、19世紀から親しまれているアメリカの民謡を引用して作られたフォーク・オペラ『Down in the Valley』、アメリカのライフスタイルの歴史の変遷について、ヴォードビル・ショーを形式として借用したともいえる『Love Life』が挙げられる。

##### (3) 亡命芸術家の活動 - カバレティストの場合

他の項目で述べたように、「亡命芸術家」という枠組みは大雑把で多様性に富む。今回の調査で対象となったのは、以下の6名であり、いずれもドイツ語圏の寄席演芸(Kleinkunst)に関わってきたアーティストである。これらの人々の活動を調査するにあ

たって、あらためて重要だと思い知ったのが、新聞や専門誌による「舞台評論」と「映像資料」である。

マイنتズのドイツ・カバレット資料館では、1970年代に亡命後、ベルリンの祝祭週間を契機に再び集った往年の芸術カバレティストたちの出演したテレビ番組を視聴する機会を得た。ドイツに帰還した後どのような活動を行い、どのような評価を受けたのかという視点から大変参考になった。戦前の活動、亡命中の活動、戦後の活動を調査した芸術家は以下の6人である。これらの調査結果の詳細については、近日中に論文にまとめる予定である。

(月)フリードリヒ・ホレンダー  
(火)ブランディーネ・エーヴィンガー  
(水)ミーシャ・スポリアンスキー  
(木)ヴァレスカ・ゲルト  
(金)マーゴ・リヨン  
(土)フリッツ・シュピールマン

(4)まとめ 亡命芸術家のアイデンティティ  
「伝統」「新しい美学の構築」「受容と伝播」  
の視点から

アメリカのヴァイル作品には、確かにプレヒトの『三文オペラ』や『マハゴニー市の興亡』などで語られて来た「異化」の理論は明示されていない。全体をまとめる理論として俳優術や音楽とテキストとの関係性を示した「異化」の理論は、明らかなかたちで継承されなかった。その理由のひとつは、音楽的な異化の手法の前提にある。『三文オペラ』の音楽的異化の手法として、基盤にあるのは、「伝統」の「異化」行為である。(たとえば、『三文オペラ』におけるピーチャムの「朝のコラール」)。ちなみに、実地調査で観た四種の違うコンセプトの演出では、ドイツにおける『三文オペラ』の特徴として、演出は別でありながら、どれも「異化」自体の変容や「異化」が中心のテーマとなっていた。それに対してアメリカのオフ・ブロードウェイでの『三文オペラ』は、1920年代の雰囲気重点が置かれ、神出鬼没な舞台の形状に特徴はあったものの、全体的には「異化」の変容にはあまり拘っていなかった。

ヴァイルのアメリカ作品では、西洋芸術音楽の伝統と直接的に対峙するかたちで、異化効果を狙っている音楽的な表現は少ない。「伝統」を共有することを前提にした音楽語法ではなく、むしろアメリカの文化的アイデンティティを表現するようなジャズ、ブルース、ポピュラー音楽から借用してきた四重唱、民謡、ヴォードビル・ショーなど、アメリカを象徴する音楽語法、あるいは劇形式を多用した。アメリカで、ことさら強調して「異化」を使用しなかったことは、アメリカで共作してきた劇作家たちとの関係性を考えれば、ヴァイルにとって必然的な選択であったとい

える。「異化」の手法の前提とその効果には、共通する古典の知識や伝統の意識が強く影響してくるからである。「異化効果」の音楽劇から、総合的なかたちでアメリカ社会を「サウンド」と「ソング」形式のなかに映しとる「社会派音楽劇」へと変容し(新しい美学の構築)、1940年代のブロードウェイに大きなインパクトをもたらす結果となった(受容と波及)。

#### (5) 今後の展開と課題

近日中にこの研究結果を活かしたヴァイルの評価を完成させ、亡命カバレーについての調査結果を論文にまとめる予定である。また、アメリカでのヴァイル作品を調査する過程で、「ミュージカルとアイデンティティ」というグローバルな問題を国際的な視野から議論する必要性を感じた。今回の科学研究費で、ハーバード大学のオジャ教授との共同研究の基盤ができたので、今後の課題としていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

著者名 大田美佐子 (研究代表者)

「アメリカで見た景色-クルト・ヴァイルの社会派音楽劇の軌跡」、岩波書店『文学』所収、2014年3・4月号、84-98頁。

査読 無し

#### 6. 研究組織

大田美佐子 (Ohta Misako)

神戸大学・人間発達環境学研究所・准教授  
研究者番号：40362751